

風水景観における景観構成の把握とその景域に関する研究
—韓国農村集落における風水景観に関する研究 その11—

正会員 ○樋口 夏希^{※1} 同 佐藤 誠治^{※2}
同 山口 泰佑^{※1} 準会員 野村 優太^{※3}

7. 都市計画 — 6. 景観と都市計画 c. 景観イメージ・景観評価
韓国 風水 景観 集落

1. 研究の背景

1-1. はじめに

本研究のその10¹⁾においては、風水景観を持つ集落の構成要素の抽出と、得水法による地形構造の把握と分類について述べている。よって本稿では、風水景観を持つ集落の、集落を俯瞰した際における景観の構成要素の把握と、その景域について分析、考察を行い、景観的観点からその評価を行っていくこととする。

1-2. 集落の対岸側に存在する視点場について

現地調査を行った13集落のうち7つの集落において、集落前面を流れる河川の対岸側に祠堂や亭、遊歩道といった、視点場としての眺望場の整備がされていることを確認できた。この対岸側に存在する、眺望場からの視界は開けており、集落を一望することができる。さらに、この眺望場の標高は全て、対する集落の標高よりも10m以上高い場所に位置しており、集落の全体像を把握することが出来るなど、集落を俯瞰することを意識した、視点場としての要素が高いと考えられる。

以上のことから、本稿では、韓国における風水景観を持つ集落は自らの集落に対する景観意識が高いものと仮定し、集落全体を見渡すための眺望場となりうる場所からの写真を元に、そこから現れる景観と、構成要素の存在景域について分析を行う。

2. 分析方法について

現地調査において得られた、対岸に存在する眺望場からの俯瞰写真を繋げ、パノラマ写真を作成する。写真は集落を中心とし、人間の両眼で立体に見える視野範囲である120°までのパノラマ写真を対象とする。この写真を線画化し、写真に写りこむ要素とその配置、可視域などの項目について分析を行い、結果を考察する。また、Daum²⁾より各集落の白地図を作成。この白地図に視野範囲と、近・中・遠・超遠景^{注1)}の目安となる200m, 600m, 1km, 1.4kmの距離景³⁾を示し、

写りこむ景観要素やその配置、写り込んでいる景域について考察を行う。ただし、視点場となる場所からの写真を撮ることが不可能であった集落においては、白地図からの考察のみとする。(3-1, 3-5) 本稿では、視点場となりうる、整備された眺望場が、対岸側に存在していることを現地調査で直接確認することの出来たシンウォルマウル、テウンマウル、サムガンマウル、ハエマウル、陶山書院^{注2)}の5つの集落を分析の対象とし、以後考察を行う。

3. 各集落の景観構成

3-1. シンウォルマウル

この集落の視点場は、白虎(西)^{注3)}の山裾に存在する亭(標高108m)である。近景には視点場となる白虎(西)の山と、集落を取り巻く河川がその90%を占めている。中景には集落の全貌と、背後に位置する主山^{注4)}河川の砂が配され集落の境界が視認出来る。調査対象地であるテベク山の支流には砂の岸が多く存在する為、河川と集落との間に砂の岸が広がり境界線を作り出していることが多い。またこの領域に集落の背後に位置する裨補^{注5)}が確認出来る。遠景・超遠景域には、主山と青龍(東)の山が配置されている。(図1)



図1 シンウォルマウル全体地図

Landscape composition and Landscape domain of Feng shui farm villages in the South Korea, Part11
- Characteristics of Feng-shui Landscape in Agricultural Village in Korea, Part11-

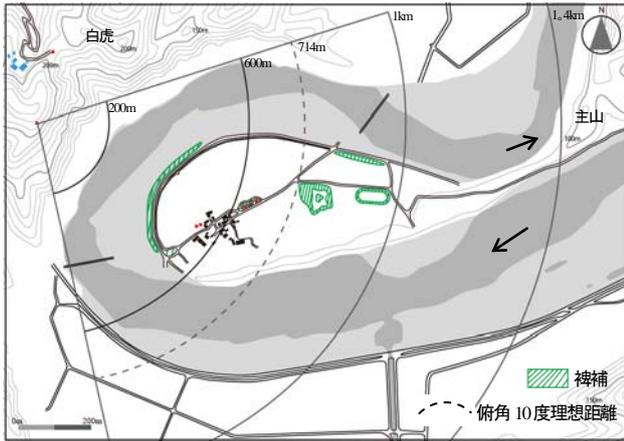


図2 テウンマウル全体地図

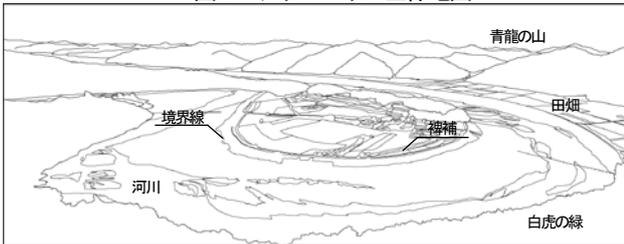


図3 テウンマウルパノラマ写真線画図



図4 サムガンマウル全体地図

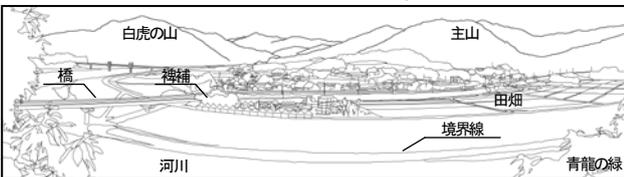


図5 サムガンマウルパノラマ写真線画図

3—2. テウンマウル (回龍浦)

この集落の視点場は、白虎（西）の山に存在する展望台（標高 190m）である。近景には視点場となる白虎（西）の山の緑が配され、中景域に集落を取り巻く河川と禰補が配置されている。また、図3より、この領域で河川と集落の境界線を視認することができる。遠景域では集落と集落東側に位置する禰補、田畑が中心に配置され、超遠景域には対岸の田畑、青龍（南）の山を視認することができる。

3—3. サムガンマウル

この集落の視点場は、青龍（西）の山裾に存在する遊歩道（標高 125m）である。近景には視点場となる青龍（西）の山の緑が配置され、中景域には、集落を取り巻く河川と、集落前方の田畑が確認出来る。また、図5より、この領域で橋・禰補が写真手前側に配置され、道・田畑が集落を取り巻くように視認することができる。また、河川と集落の境界線を視認することができる。遠景域では集落・田畑が大部分を占めており、超遠景域では、集落の背後に位置する主山と、白虎（北）の山の連なりが図5よりみてとれる。

3—4. ハエマウル

この集落の視点場は、白虎（北）の山裾に存在する花川書院より少し西に位置した標高 96m の高台、芙蓉台である。近景は河川がその大部分を占め、中景には集落の全貌が配置されている。また図7より、禰補林が集落の手前に配置されており、これによって集落の境界が出来ていることが視認出来る。遠景には集落と田畑、集落の背後に回り込む河川を確認することができ、超遠景域には、青龍（南）の山の連なりと、対岸側の風景が広がっている。

3—5. 陶山書院

この集落の視点場は、小高い丘の上に存在する試土壇（標高 140m）である。試土壇は、陶山書院を建設した李退溪の学徳を残し、地方儒学者達の士気を高める為に実施された「陶山別試」が行なわれた場所であり、書院とも関連深い建物である。近景には試土壇が存在する側の岸と、書院の前面に流れる河川が配置され、中景には書院の全貌と、書院を取り巻く山、背後の主山が配置されている。遠景域には主山の頂点が確認でき、西・北・東の三方にその連なりが広がっていることを図8より視認できる。

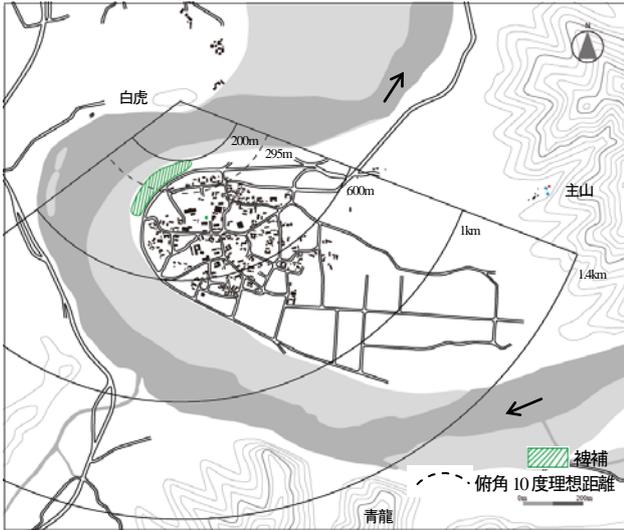


図6 ハエマウル全体地図

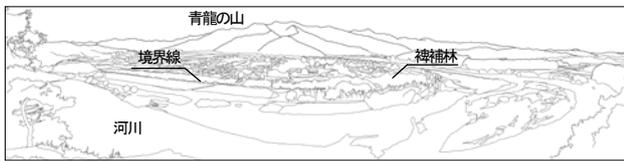


図7 ハエマウルパノラマ写真線画図

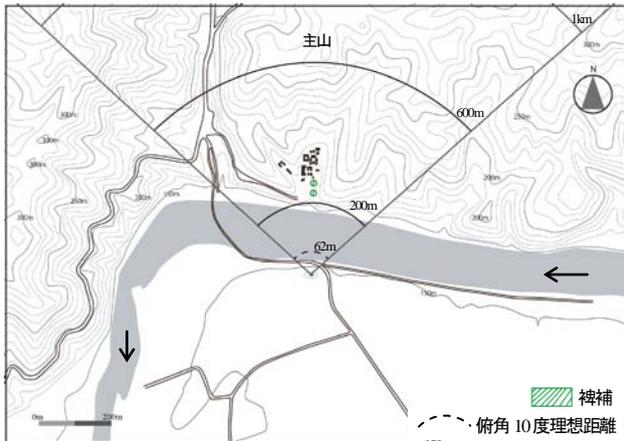


図8 陶山書院全体地図

3—6. 各要素の配置からみた視点場の評価

理工図書出版である「風景画と都市景観—水・緑・道・まちなみ—」では、街の全貌を見渡す景観について以下のように述べている。「市街地を俯瞰する場合は、市街地内に特徴的な構成要素が存在しなければならない。市街地の中にシンボリックな建造物が含まれていること、市街地の区切りとなるような公園・緑地等が含まれること、あるいは海辺等の視対象が俯角10度以内に含まれることが必要である。このような市街地を俯瞰するとき「絵になる景観」が得られるのである。」⁴⁾

今回の分析は市街地ではなく、農村集落を対象としたものであるが、以上の内容は今回の結果においても

例外ではないと考えられる。集落の背後、超遠景に位置する主山はシンボリック的存在であり、集落の前面に位置する河川により集落の領域がはっきりと視認できる区切りが出来ている。また、以下の内容については次節にて分析を行うが、俯角10度以内に河川等の視対象が含まれている。このように、風水景観を持つ集落は、その全貌を俯瞰した際、絵になる景観となる可能性が高いと考えられる。更に、対岸に存在する視点場から集落を俯瞰した際、集落の前面に禊補を視認することのできる集落が80%と多く存在している。このことから、住民の風水意識と、景観への意識の高さを窺うことができる。

4. 俯角の計測と理想景域の算出

本節では、選定写真の視点場から集落を取り巻く河川を目視した際の俯角を計測する。計測の際には、Google Earth⁵⁾を使用し、視点場の標高、河川の標高を測った後、2点の標高差を計測した。得られた標高差を理想値である $\tan 10^\circ = 0.1763$ で割ることで、河川を眺める際の理想の距離を計測し、この値から各集落における河川の理想存在景域を示す(表1)。この理想存在景域をもとに、実際の景域に河川が含まれているかどうかを白地図にて確認し、風水景観を持つ集落の景観評価を行う。表1より、理想景域が近景である集落はシンウォルマウル、陶山書院の2集落であり、この理想景域に実際に河川が存在する集落は2集落であった(図1・図8)。理想景域が中景である集落はサムガンマウル、ハエマウルの2集落であり、この2集落についても実際に中景域に河川が存在していることが図4、図6より確認出来る。また、理想景域が遠景である集落はテウンマウルの1集落であり、図2より遠景に河川が存在していることが確認出来る。

以上の結果より、本稿において選定した対岸に視点場を持つ集落は全ての集落において河川が俯角10度以内に含まれることが分かる。この結果が景観の良さにつながっていると考えられ、景観を意識し理想の位置に視点場を作りあげた可能性が高いと考えられる。

表1 俯角10度の理想距離と理想景域の測定表

集落名	視点場 標高(m)	河川 標高(m)	標高差(m)	俯角10度の 理想距離(m)	理想景域
シンウォルマウル	108	89	19	107	近景
テウンマウル	190	64	126	714	遠景
サムガンマウル	125	56	69	391	中景
ハエマウル	122	70	52	295	中景
陶山書院	165	154	11	62	近景

5. 距離景別の視対象

景観要素を山、河、建築、禰補、田畑の5種類に分類し、白地図から得られる要素の出現回数を表した表を作成した(図9)。山は近景、超遠景が最も多く、続いて遠景、中景と全ての景域において出現していることが確認出来た。また、河においては中景が最も多く、続いて近景、超遠景、近景と、この要素もまた全ての景域において出現していることが分かる。このように、全景域において出現率が高い要素については、写真において連続性の高い要素となり、奥行きのあるパースペクティブな軸景を持つものとなる。対して禰補、田畑においては近景域に出現回数はなく、中景・遠景に出現回数が多くみられ、建築物においてはその大部分が中景を占めている。このように、単景域での出現回数が多い要素は、写真において集合感の高い要素となり、領域を視認することが容易であると考えられる。

また、山・河を自然、建築物を人工、禰補・田畑を人工的自然とさらに3つにグループ化すると、自然要素は全景域、人工要素は中景、人工的自然要素は中・遠景への配置が約80%を占める結果となっており、模式化すると図10のように表わすことが可能である。

以上のことから、風水景観は奥行きのあるパースペクティブな軸景を持つ景観であり、人工・人工的自然要素が自然要素に囲繞された景観であることが分かる。

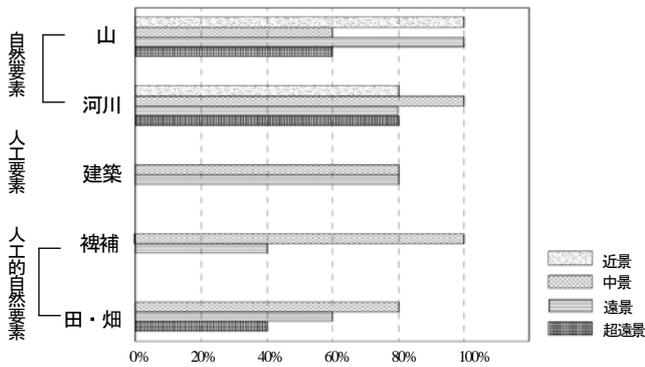


図9 白地図からみた要素の出現回数

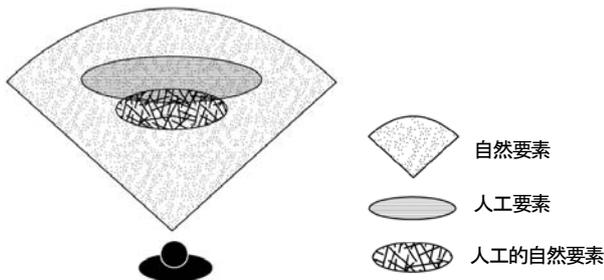


図10 自然要素・人工的自然要素・人工要素の配置模式図

6. 総括

本稿では、白地図と現地調査によって得られたパノラマ写真、Google EarthやDaumといったインターネット上の地図サイトによって得られた情報をもとに分析を行った。3節では、白地図とパノラマ写真をもとに各集落の景観構成を把握し、風水景観に現れる主山というシンボリック的存在と、河川による集落の境界線の出現を確認した。4節では、視点場から俯瞰する河川への俯角の計測を行い、調査対象である5つの集落全てにおいて、その角度が俯瞰景観での理想値とされている10度以内に存在していることを示し、3節の結果と合わせ、この結果が絵になる景観を生み出していることを明らかにした。5節では、景観要素を山、河、建築、禰補、田畑の5種類に分類し、白地図から得られる要素の出現回数を距離景別に表した表を作成した。この表から自然要素は全景域に現れていることが明らかとなり、写真において連続性の高い奥行きのあるパースペクティブな軸景を持つ要素となることを示した。また、人工・人工的自然要素については単景域での出現回数が多く、写真において集合感の高い要素となり、領域を視認することが容易であることを確認した。

以上のことから、視点場から臨む風水集落の景観は景観評価の高いものになっていると考えることができ、この視点場を現在の位置に作り上げていることは、自らの集落への景観意識が高いと考えられる。

【参考文献】

- 1) 野村優太・佐藤誠治・山口泰佑・樋口夏希:「風水集落の構成要素の抽出と得水法による地形構造の把握 -韓国農村集落における風水景観に関する研究 その10-」, 2012.12
- 2) 「Daum」, 韓国地図サイト, <http://local.daum.net/map/index.jsp>
- 3) 萩島 哲著・理工図書株式会社発行:「風景画と都市景観一水・緑・道・まちなみ」, p11
- 4) 萩島 哲著・理工図書株式会社発行:「風景画と都市景観一水・緑・道・まちなみ」, p127
- 5) 「Google Earth」, <http://www.google.co.jp/intl/ja/earth/index.html>

【補注】

- 注1) 近景域 0~200m, 中景域 201~600m, 遠景域 601~1000m, 超遠景域 1001~ m
- 注2) 陶山書院は集落ではない為、本来対象外であるが、風水における吉地の地形条件が顕著に表れた地勢を持っていることから、本稿では書院の敷地全体を1集落と見立て、他の4集落と同様に分析を行うこととする。
- 注3) 集落から主山を背にして見て、左側の山が青龍、右側が白虎、向かい側が朱雀とされている。
- 注4) 主山とは集落の背後に高くそびえる山(=主山、鎮山)があり、前方に水流(=得、水口)があり、周囲には四神砂と呼ばれる「玄武」、「青龍」、「白虎」、「朱雀」を表す山々があることとされている。
- 注5) 禰補とは、吉地に足りない条件を補うための作法である。

*1 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

*2 大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士

*3 大分大学工学部福祉環境工学科 学部生

*1 Graduate Student, Oita Univ.

*2 Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Oita Univ., Dr.Eng

*3 Undergraduate Student, Oita Univ.